

東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・ 市民社会の役割

山 本 俊 正

本プロジェクトは、今年度から開始された。名称が長いので、通称「東アジアの平和」プロジェクトと呼んでいる。プロジェクトは、以下のような動機、趣旨によって開始された。「21世紀に入り10年以上が過ぎた今日、東アジアは、世界で最も高い経済成長を達成し、域内の経済は相互に強く結びついている。東アジアはお互いをかけがえのない経済のパートナーとしている。しかし、他方では、近代以来の歴史的経緯から深刻な分断が続き、冷戦状況が残る中、相互信頼は非常に弱い。朝鮮民主主義人民共和国（以降北朝鮮）と日本の国交は正常化されておらず、南北朝鮮の統一は進展していない。北朝鮮と米国の対立も東アジアに大きな負の影を落としている。また、中国と台湾の間の緊張関係（兩岸問題）のみならず、過去の歴史認識の相違に起因するお互いの対立感情は、各国のナショナリズムを刺激し、時として平和を脅かす「危機」として眼前に噴出する。（竹島、尖閣諸島、等をめぐる領土問題）（中略）東アジアの平和の構築に向けて、宗教者には何ができるのだろうか、またその役割とは何だろうか。国家単位を超えた主体（宗教団体・NGO、市民社会等）による平和の実現可能性はあるのだろうか。本研究プロジェクトは、東アジアにおける平和実現のための国家間の対話と協力をその視座に置くと同時に、国家以外の主体、すなわち自治体や、市民社会、NGO、宗教者等による協力及び信頼醸成の働きに注目し、その可能性を探求する。（プロジェクト趣旨文より抜粋）

上記趣旨に基づき、今年度は2回の研究会を開催した。概要は以下の通りである。

第1回研究会「東アジアの和解と平和-日韓キリスト教史の視点から」

日時：2013年9月27日（金）

発表者：徐正敏氏（明治学院大学客員教授）

発表では、プロテスタント教会を中心に、日本と韓国のキリスト教の歴史が、日韓関係において、どのような位置をしめ、関係構築がなされてきたかについて、説明がなされた。また、日韓キリスト教関係史というテーマを、韓国の視点からではなく、日本の初期のプロテスタント教会のアイデンティティから、考察が試みられた。徐氏は、日韓キリスト教関係史が、長い葛藤の歴史から、和解の方向に向かっていることを、史実及び個人的な経験に基づき、指摘された。国家間の日韓関係が、依然として葛藤の歴史を克服できないのに対して、部分的ではあるが、エキュメニカル運動の成果として、日韓の和解の歴史が両国のキリスト者によって、歩まれていることを高く評価された。具体的には、韓国が軍事独裁政権の時代に、韓国のキリスト教の人々が担った民主化運動の一番の協力者として、彼らを理解し、心から助けてくれた仲間が、日本のキリスト者のグループであったことが、述べられた。日韓関係の和解の歴史は苦難の中における連帯運動によって、出発したことが指摘された。

第2回研究会「東アジアの和解—WCC（世界教会協議会）第10回総会（釜山・韓国）報告

日時：2014年1月21日（火）

発表題及び発表者：1)「教会論の動きと礼拝」神田健次氏（神学部教授）

2)「宣教論の新たな展開と若手神学者との交流」

村瀬義史氏（RCC主任研究員）

3)「カトリック信徒から見たWCC総会」

小林和代氏（神学部大学院博士課程）

神田氏からは、WCC総会での礼拝と教会論のテキストを中心に発表がなされた。開会礼拝の特色、これまでの信仰と職制委員会の歩みに関連しての教会論のプロセス、東アジアという文脈での開催の意義について言及された。また、新た

に出された歴史的合意文書である『教会』の構成と特色、エキュメニカルな意義について説明された。村瀬氏からは、WCCの宣教・伝道に関する新たな指針について、30年ぶりに出された文書、「いのちに向かって共に一変化する世界情勢における宣教と伝道」の解説がなされた。「聖霊」に強調点を置いた宣教論、「周縁からの宣教」などの鍵概念の背景について説明がなされた。また、スライドを交えて、グローバル・エキュメニカル神学研修（GETI）での学び、交流が紹介された。小林氏は、カトリック教会とWCCの関係、資料に基づく総会への女性参加者の年代別比率、社会問題への教会、個人の関心の必要性などについて述べられた。